

川を歩く楽しみと 木琴の音色。

居酒屋人気と共に、朝から開いている居酒屋「いいい」や「まるます家」のある赤羽が注目されている。私も時折り、赤羽のまるます家に出かける。人気店なのでいつ行っても混んでいるが、幸い回転が速く、少し待たば座れる。客が長居しないように気を使っているのだろう。

ここで少し飲んだあとは、北へ歩いて、荒川に出る。荒川と隅田川が分かれる岩淵水門のあたり。この土手から眺める水の風景はいつ見ても素晴らしい。

隅田川がいまやビルに囲まれた人工の川のように見えるのに対し、大正時代に十年以上かけて作られた放水路の荒川のほうが自然の川を思わせる。

昭和のはじめ、永井荷風はこの荒川放水路の寂寥とした風景に惹かれ、何度も足を運んだ。随筆「放水路」(昭和十一年)や『断腸亭日乗』を読むと、放水路沿いに歩く荷風の孤影が浮かびあがる。

※ 荒川は、奥秩父の甲武信ヶ岳を水源に持ち、秩父盆地、関東平野を流れ、隅田川になる。のちに、放水路の完成によって、岩淵で隅田川と分

かれ、東京湾に注ぐようになった。河口は江戸川区と江東区の区境になる。

以前は荒川放水路と呼ばれていたが、河川法の改正によって昭和四十年(一九六五)に荒川が正式名になった。私などの世代には、昔の荒川放水路のほうがいいのだが。

全長一七三キロ。日本の河川では十五番目に長い。この荒川沿いをすべて歩いた人がいる。

伊佐九三四郎さん。山好きで、これまでも「奥多摩奥武蔵の山々」「関東の名山」などの山の本他、「幻の人車鉄道」という、かつて柴又あたりを走っていた、人間が車両を押す電車以前の人車鉄道についての面白い本もある。

伊佐さんはあるとき、荒川沿いを歩くことを思い立つ。東海道五十三次を全部歩く、あるいは、芭蕉のあとをたどって東北を歩くなどと同じ趣向。

もちろん、歩き続けたわけではなく、区切りごとに歩き継いでいる。驚くのは伊佐さんの年齢。昭和七年

川本三郎 文

text by Saburo Kawamoto

かわもと さぶろう 1944年東京生まれ。東京大学法学部卒業。朝日新聞社記者を経て、映画、文芸、都市論の評論活動に入る。著書に「大正幻影」(サントリー学芸賞)、『荷風と東京』(読売文学賞)、『林芙美子の昭和』(毎日出版文化賞)、『マイバック・ページ ある60年代の物語』、『銀幕の銀座』、『君のいない食卓』など。『白秋望景』で伊藤整文学賞(評論)を受賞。近著に「そして、人生はつづく」『映画を見ればわかること』『ギャバンの帽子、アルヌールのコート——僕がしのヨーロッパ映画』など。

秩父を流れる荒川

奥秩父の甲武信ヶ岳を源流とする荒川。写真は秩父市を流れる荒川を、白川橋から見た風景。下流は白久の渡し跡。秩父の山で切り出された木材は一度ここに集結し、荒川によって運ばれた(撮影・伊佐九三四郎)



(一九三三)生まれというから七十歳を超えてからの試みになる。山登りをしてきたから健脚なのだろう。

※ 昨年の秋に出版された「大河紀行 荒川——秩父山から東京湾まで」(白山書房)はその記録。

まず源流をめざす。甲州、武州、信州の三州にまたがる甲武信ヶ岳のなかに分け入る。渓流に沿って登ってゆく。滝を見ながら山道を歩く。原生林のなかで野営する。翌日、ようやく山の奥の「荒川源流点」の碑にたどり着く。

うれしくなった氏は、その碑を何度も撫で、源流の水割りで祝盃をあげる。微笑ましい。源流に求るのは、長年の夢だったという。

しかし、そこはゴールではなく、あくまでもスタート地点。「源流点」から大河紀行が始まる。七十歳を過ぎた氏が何日も、何日もかけて荒川に沿って歩く。困難な旅に思えるが、川に沿って歩くのは伊佐さんにとって楽しいことだったのだろう。

※ 渓流から大河へと広がってゆく川の流れ、川沿いの村、宿場町、神社、寺、橋、あるいは鉄道の駅。川沿いの風景が目を楽しませてくれるから歩くことが苦にならない。

※ 川は人と人をつなぐ。土地と土地をつなぐ。秩父の三峰神はお犬様(オオカミ)を祀る。この三峰信仰は、江戸で材木を扱う深川木場でも広がった。秩父で切り出された木材が荒川によって江戸に運ばれた結果だという。川が秩父と江戸を結んだ。

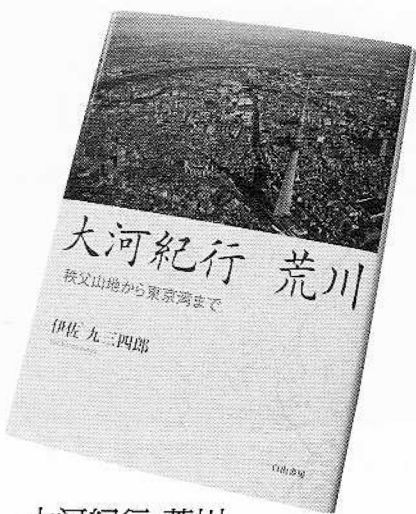
※ 近年、八高線に乗ってよく秩父に出かけるので、この本は、秩父の歴史を知るうえで学ぶことが多い。二〇〇七年の七月に歩き始めて、伊佐さんがようやく荒川の東京湾に注ぐ河口にある「海からゼロ起点」にたどり着くのは、二〇一二年一月二十五日。四年半かけて歩いたことになる。

※ 「丸石を敷きつめた浜辺に下り水を掬ってウイスキー割り、マグカップを高だかど掲げてひとり乾杯する」拍手！ 壮健が羨しい。

※ まだ四十代の頃、利根川に沿って歩いてみようと思いたち、夏の一日、埼玉県の栗橋から妻沼まで約二五キロを歩いたことがある。朝から歩いて夕方まで約七時間。比喩ではなく木当に「足が棒」になり、利根川歩きは、あっけなく挫折した。

※ 『大河紀行 荒川』を読んだら、まだ元気なうちに伊佐さんに做って荒川踏破を試みたくなる。

※ 十月、マリンバ奏者で、日本では数少ない木琴奏者でもある通崎睦美さんの木琴リサイタルに行く(東京



大河紀行 荒川
秩父山地から東京湾まで
伊佐九三四郎 / 白山書房 / 2100円
2012年11月発売
荒川の源流である秩父山地から東京湾まで、歩いて踏破した渾身の紀行ルポ



お犬様(オオカミ)を祀る三峰信仰。
三峰信仰は東京から関東一円、そして長野、山梨、東北地方の広範囲にわたる(撮影・伊佐九三四郎)



通崎睦美リサイタル「木琴文庫」vol.2

10月10日に東京オペラシティリサイタルホールで行われた。通崎睦美リサイタル「木琴文庫」vol.2で、木琴を演奏する通崎睦美さん(右側)

木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」

通崎睦美/講談社/1995円/2013年9月発売
戦前戦後、世界一と称された木琴奏者
平岡養一の一途な音楽人生をたどる評伝



最後に演奏されたのは、江文也の「祭ばやし」の主題による狂詩曲。

江文也(一九〇一―八三)は台湾出身の音楽家。映画ファンならご記憶だろう。侯孝賢監督の日本を舞台にした作品「珈琲時光」(二〇〇三年)で、一青窈演じる主人公が、その足跡をたどっていた。

映画のプログラムにある片山杜秀さんの解説によると、戦前、日本で学び、山田耕筰と橋本國彦に学んだという。一九八三年の死後に本格的評価が始まった。こういう作曲家の曲を取り上げるのだから、通崎さんは意欲的だ。

日本の木琴奏者といえば平岡養一(一九〇七―八二)がいる。通崎睦美「木琴デイズ」(講談社)は、大先輩への敬意のこもった評伝。数多くの資料を駆使した大

まるでフィクションのよう。高校時代、先生に「冗談はいいかげんにして、本当の住所を書きなさい」と叱られたという。

池袋の東京芸術劇場で、エリアフ・インバル指揮、東京都交響楽団のマーラー交響曲第六番「悲劇的」を聴く。いまマーラーといえばインバル。名演に圧倒されたが、オーケストラのなかに木琴奏者がいるのに気づく。通崎さんの演奏を聴いてから、木琴に目がゆくようになっていく。

「ビッグコミックオリジナル」に連載されている村上もとかの漫画「フィチン再見」が単行本になった(小学館)。

日本の少女漫画家の草分け、上田としこ(一九二七―二〇〇八)の伝記漫画。上田としこについては、以前、本誌で、ふなこしゆりさんが書いているが、昭和戦前から戦後も活躍した

少女漫画の第一人者。村上もとかの「フィチン再見」の第一巻は、その少女時代を描いている。東京生まれだが、父親の仕事で、幼いときに旧満州のハルビンで育った。「東洋のバリ」と呼ばれた国際都市で、近所には、満州人、中国人、ロシア人など、さまざまな国の人間がいた。村上もとかは、子ども時代のとしこが、日常的に彼らと親しくしていた様子を描いている。

「フィチン」とは、上田としこの人気漫画だが、主人公は中国人の少女。としこの師の松本かつぢにも「ボクちゃん」という中国人の男の子を主人公にした漫画があるから、その影響もあるのだろうが、何よりも、としこが「東洋のバリ」で育ったことが大きい。こういう漫画が描かれ、日本の少女たちに広く読まれていたことを忘れてはなるまい。

村上もとかは名作「龍-RON」で、戦前の満映を描いているだけに、「フィチン再見」も、昭和史に話が広がってゆくのだろう。●

変な労作で、これを読むと、平岡養一に対してと同時に、木琴という楽器にも惹きつけられる。通崎さんは音楽だけではなく、文学作品にも目を通している。

例えば、明治時代、木琴は子どもの玩具と思われていたということを説明するために、森嶋外の名短篇「棧橋」(明治四十三年)を引用する。

「棧橋が長い長い。四筋の軌道が、縦に斜めに切っている鉄橋の梁に、長い桁と短い桁とが、子どものおもちゃにする木琴のようにわたしてある」

鷗外の「棧橋」に「木琴」の言葉があるとは。こういう細部をきちんと引用するのに感服する。

あるいは、平岡養一の木琴演奏にピアノ伴奏をした宅孝二(一九〇四―八三)を語るときは、このピアノストが永井荷風と交流があり、「断腸亭日乗」にその名が記されていることも見逃さない。

音楽の話だけにどまらず、鷗外や荷風が登場することで世界が広がる。

平岡養一がミステリ好きで、泡坂妻夫の「口杖のどらんぶ」が気に入り、なんとか翻訳してアメリカに紹介しようとした、という話も面白い。

結局は実現しなかったのだが、このとき、平岡養一が共訳者としてしたのが、付合いのあったジョン・ポールだったというのにも驚く。アカデミー賞を受賞したノーマン・ジュインソン監督、シドニー・ポワチエ、ロッド・スタイガー主演「夜の大捜査線」(一九六三年)の原作者である。

通崎さんは、京都に住む、着物好きのエッセイストとしても活躍しているが、知識が幅広い。ちなみに通崎さんの住む町の名は、天使突抜。本当の町名だが、

フィチン再見!

村上もとか/小学館/580円/2013年10月発売
「ビッグコミックオリジナル」に連載中の村上もとか最新作の1冊目。女流漫画家という道を拓いた上田としこの伝記漫画



2013年12月増刊

上智大学と 四谷界隈の二〇〇年

ザビエルが抱いた夢 川村信三

上智は二日にして成らず 増田祐志

他大学の学長になって思う、上智大学の強さと課題
四谷界隈「通」がお薦めするインターナショナルな食
神父の日常/留学生に密着/大人のまちあるき

2014年1月増刊

北里研究所の二〇〇年、北里大学の五〇年 生命科学の開拓者たれ

座談会 Greater Kitasato Family

北里研究所、東大医学研究所、慶應医学部が北里柴三郎の「実学精神」を胸に、未来に向けてさらなる連携を描く

座談会 セレンディビティ 偶然を大きな発見に結びつける力
教えて先生! 糖質制限食/遺伝力ウンセリングほか

最前線を歩く チーム医療/農医連携/予防医療ほか

好評発売中! 定価700円(税込)

東京人

都市出版

〒102-0072東京都千代田区飯田橋4-4-12フイズビル6F
TEL.03-3237-1705 FAX.03-3237-7347